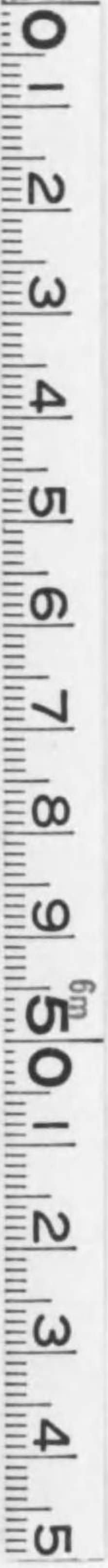


特259

53

殺生石

昭和改訂版
内三



始



殺生石

〔梗概〕玄翁と言へる聖、上州那須野の原は一つの石に近つかんとせしに、一人の女性現われ、この石は觸るゝもの人間を始め鳥類畜類まで緦て命を奪ふ、不思議なる殺生石のことを語り、且つ昔妖狐の精朝廷を覆さんと義妃となつて宮中に入り、時の帝に禍ひせしも、陰陽博士に見現はされ、遂に此原に討たれし怨念此石となれる由來をも物語る。かくて我は其石の靈なるよと言ひ捨て、姿を隠せり。道人即ち拂子を取りて石面に向ひ一喝すれば、石は二つに割き、野干の姿現れて、唐土我朝に於ける妖禍の數々を語り、遂に三浦之次上總之輔等に退治せらるる様を舞ひ學びて後、再び惡事を働くまゝと誓ひ成佛して失せぬ。



シテ 里女
後シテ 野千の精
ワキ 玄翁道人

所 下野國那須原
季 秋

殺生石

わき左舟 禾上
心心 残心 枯心 そ心 お心 云心 水心 の心 浮心 世心 の心 揺心 み心 出心
あ心 よ心 是心 は心 深心 海心 と心 い心 は心 道心 人心 也心 我心 智心

識カ の 床カ を 立カ けカ ぐカ ばカ 一カ 大カ 事カ を 殺カ まカ 一カ 見カ

所シヨ を 舞シヨ きシヨ 一シヨ 處シヨ 定シヨ まシヨ 拂シヨ こシヨ のシヨ を うシヨ ちシヨ あシヨ つシヨ て

世セ 上上 の 眼メ を けケ ぐケ ばケ 世セ の 女メ ちチ の 心ココロ を

一が^上けん^上と^上教^上よ^上より^上冬^上夏^上を^上も^上む^上ま^上い^上
ま^上と^上ね^上い^上キ^上ヤ^上雲^上氷^上の^上身^上に^上し^上つ^上く^上も^上定^上ま^上
た^上く^上浮^上世^上の^上旅^上よ^上ま^上じ^上ひ^上り^上を^上れ^上ん^上を^上
白^上河^上乃^上流^上び^上ま^上め^上と^上る^上下^上野^上や^上形^上湊^上世^上の^上
源^上よ^上流^上は^上な^上り^上く^上急^上に^上流^上ふ^上是^上を^上
ま^上形^上湊^上世^上の^上源^上よ^上流^上て^上い^上ち^上ふ^上そ^上の^上

石^上れ^上多^上り^上へ^上る^上ま^上よ^上く^上世^上流^上ひ^上そ^上わ^上き^上持^上も^上け^上
石^上の^上多^上り^上へ^上る^上ま^上よ^上く^上世^上流^上ひ^上そ^上わ^上き^上持^上も^上け^上
形^上湊^上世^上の^上教^上生^上石^上と^上て^上人^上間^上中^上に^上及^上び^上た^上
鳥^上類^上畜^上畜^上な^上ま^上で^上も^上さ^上い^上る^上に^上命^上形^上一^上
か^上く^上れ^上そ^上ろ^上一^上き^上教^上生^上石^上と^上も^上志^上ろ^上一^上免^上
され^上て^上お^上僧^上ま^上い^上と^上め^上ぬ^上へ^上る^上命^上が^上そ^上こ

立のまゝ強へ^{わき} 押^上け石は何あかく教^まを
 を^しつゝの^あらん ^{して} 首^鳥羽^の院^北上^りま
 ぶ^まま^深れ^あと^中一^人の^執心^石と^成
 一^深也^{わき} ^弓上^ふ一^きる^りと^よま^深の^前を
 殿^上の^備一^りま^り一^身の^は遠^國よ
 魂^残と^め一^串は^何あ^ぞ ^{して} 夫^も謂^ふ

のあま^い一^我首^の中^あい^まあ
 古^身れ^風情^初乃^末誠^を志^しぬ^やあ
 ら^一 ^{して} し^や妻^の心^を白^雲れ^ま深^乃
 ま^へと ^{わき} 夢^一首^の教^をま^ま ^{して} 今^う魂^を
 ら^あま^はけ^る ^{わき} 敵^の心^を一^念の
 和^心と^あい^まは^け世^をの^生来^れ人^不

してあを今 形波池の原に立石れづく
 苔も朽ふし初までと 枕をを踏したて
 又立ゆる草れ原 物冷しき秋風の海味
 松桂の枝も啼つき 旅葉菊れをよか
 くれまむけ原の時しと 物まじき秋の
 夕うね 物まじき 物まじき 物まじき 物まじき
 夕うね 物まじき 物まじき 物まじき 物まじき

物怪ゆへ 引上 押は玉藻の原と申し 出生お
 世定ましきしと じづくの誰を白雲の上
 人より一身みるましに 上 枕まじき好むを
 あをとして 容顔美醜麻をりしうらみ
 うどの敷きあはし ありし時玉藻の原
 が 智恵あををさうまはふよし 字とてあるる

車かき 日 經論 聖教 和漢の文 詩歌

管絃小玉るを 関小言乃 言うらふ

心底 思きり かなれ ばとて 玉藻の前と

ぞ 石れ 希る 或時 帝と 清涼殿 小侍

出あり 月卿 雲客 乃 堪能 なるを せめ

集あ 笈 絃の 清 括 あり 小 比 秋 乃 末

月ま 雲 宵 此 雲 乃 たり たる
さま 赤 対 多 少 風 に 清 殿 乃 燈
火 清 子 たる 雲 此 上 人 立 發 ぎ 松 明 と
く 雲 此 たる 玉 もの 前 身 より 光 を
ち あり ちて 清 涼 殿 を 照 へ ば 光 火 肉
子 満 ち たり 乃 屏 風 萩 の 戸 闔 の

畫 圖 比 畫

夜乃錦ありしりどヤラ光に輝て備ふ
月此まヤラハとくありしヤラ上ヤラ門そまヤラハよりヤラも
清ヤラハ怒とあヤラハせヤラハ臨ひヤラハしヤラハるヤラハ日ヤラハ安倍ヤラハ此ヤラハ集ヤラハ成
うヤラハあつてヤラハ勤ヤラハ快ヤラハふヤラハ中ヤラハ極ヤラハ是ヤラハをヤラハひヤラハとヤラハみヤラハ玉
藻ヤラハの前ヤラハがヤラハ不ヤラハ為ヤラハなヤラハれヤラハやヤラハ王ヤラハ法ヤラハをヤラハ願ヤラハんヤラハと
化ヤラハ生ヤラハしてヤラハまヤラハりヤラハしヤラハるヤラハ里ヤラハ調ヤラハ伏ヤラハのヤラハ糸ヤラハ有ヤラハべヤラハしヤラハと

卷ヤラハまヤラハれヤラハばヤラハ勿ヤラハふヤラハ上ヤラハ教ヤラハもヤラハらヤラハりヤラハ引ヤラハ入ヤラハるヤラハ
玉ヤラハ深ヤラハ化ヤラハ生ヤラハをヤラハもヤラハまヤラハれヤラハ身ヤラハ小ヤラハ形ヤラハ次ヤラハ理ヤラハのヤラハ草ヤラハ此
毒ヤラハとヤラハ消ヤラハしヤラハたヤラハきヤラハ此ヤラハ里ヤラハ相ヤラハとヤラハうヤラハ極ヤラハ小
委ヤラハ説ヤラハりヤラハゆヤラハふヤラハ清ヤラハ身ヤラハいヤラハつヤラハたヤラハるヤラハ人ヤラハ沙ヤラハん
今ヤラハ何ヤラハをヤラハうヤラハはヤラハむヤラハまヤラハきヤラハまヤラハ古ヤラハのヤラハ玉ヤラハ深ヤラハのヤラハ前ヤラハ
そヤラハらヤラハ形ヤラハ次ヤラハ理ヤラハのヤラハ殺ヤラハ生ヤラハ石ヤラハ生ヤラハ石ヤラハ魂ヤラハよヤラハそヤラハりヤラハ也

わき

実や解りぬ、悪念の却て善心と成へん

純らなるをさつをさつとくへん、回くわん

解をこころび解し、あつさつり

しや我の管の浅智の夕煙のなるり

りのあふ成る、さんげの安寂さん

夕園の夜にさるれどは、ああり

燈も我にありと思ふ、忍を以て信
 子と名よりくれ失ふたりや、石よかくれ
 うせよあり中入、石を以て中せ
 とも、善の國七、皆成佛ときく時

本よ、里に解、具足せり、況るを、
 つくるあふ、成に、おひ、あふ、
 なるを

天竺まで八咫足太子のほられりぬ。大
唐よりとも幽王乃后廢姒と現し。我
船にて八島羽院の玉藻此前と八成なる
なり。我王法をかこむると。仮に抱女の
形と現し。玉藻小迫づききられを。清し
なる院に清命をとりんと。歎びを

志し所は。安倍の泰成。酒伏の糸おをほ
志め。壇小五らと此幣。湯をたて玉藻
に清幣を拵せは。肝袋を碎き祈
り。斯に。因上。於て。玉藻を。若し。めて。ぐ
幣。白帛を。追。取。と。ふ。その。玉。藻。并。より。を
里。海。山。を。越。す。は。世。よ。か。く。ま。は。む。

下
生後勅使まきのさぐ〜三浦乃女上
総の女あ人よまん〜あされつ〜那須
聖の化生此ものを退治せよとの勅茂
うけ〜野千ハ犬よ似〜まらバ犬よて誓
古有〜とそ〜百日犬をぞ射〜りけ家
是犬追物の始とらや〜あぬるか里

狗衣あよ〜〜
まらあ〜草茂と〜かまらあ〜身
をたふと那須聖のあよあ〜き出〜
を猪人の追つま〜つさ〜つよつあ〜
矢此下よ射伏ら〜て帰時よ命を流
よ那須聖の京のあ返と消〜と於眺ふ

又
又

け野み殊に^{ヤラ}殺生石と成る人をも^ハ
 事多年あれを今あひる^ハた浄法を
 う^ハ後悪事をい^ハた^ハあ^ハべ^ハ
 すと^ハ僧^ハの^ハ約束^ハした^ハ石と成て^ハ
 鬼神の^ハあ^ハた^ハ失^ハつ^ハま^ハり^ハ

昭和十年三月止五日印刷
 昭和十年三月三十日發行

定價金五拾錢

著者 佐權 有所

著作者 寶生 新
 東京市下谷區上根岸町八十二番地

發行兼印刷者 江島 伊兵衛
 東京市京橋區銀堂西六丁目三番地

發行所 下掛寶生流誼本刊行會

終

